



本 ほん

田 でん



戦

国期や江戸期の地検帳などでは、田ごとの石高を表す時に「本田高二百石、新田高百石」[参考]「一石はおよそ150kg」などと記しているのであるが、この本田と新田という呼び名が旧柿の木山村を構成していた二つの地区名そのものである。明治9年までその名があった柿の木山村は、ここ本田と仁井田を併せた地域であることは、先月号で紹介させていただいた。そもそも仁井田という地名の由来は「新しい田」新田であることも先月号で触れた。それに対して本田は「もともと拓かれていた田」という意味である。つまり、本田は仁井田よりも集落としての歴史は古く、長く柿の木山村の中心地であった。

本田は、仁井田川を挟んで仁井田地区の対岸に沿っている。地区の南東側の山に沿って高知道が走る。その昔は仁井田よりもこちらが中心地であったということが今となつては想像できない。

さて、これまで何度か「郷土制度」を取り上げた。江戸期の土佐藩財政改革の目玉政策のひとつであったこの制度は「武士以外の身分の者でも、ある一定の面積の原野を切り開き、水田を作り、その地で耕作を続けるならば、名字帯刀を許し武士とみなす」というものである。現在の窪川地区全体で、当時およそ50名の郷土が誕生したの



地区の氏神様「白皇神社」

であるが、中でも高知城下の浦戸町からここ本田の地にやって来て、三十石分の荒地を一家総出で開拓した宮内市蔵が窪川郷土第一号である。浦戸での市蔵は「福山屋」という屋号の商人であった。同時に町年寄（土佐では総年寄と呼んでいたという説もある）という役人を務めていたという。当時は宮内姓を名乗らず福山屋伊三郎という名で暮らしていた。福山屋はたいそう繁盛していたようであるが、伊三郎はその商店を閉め、町年寄役も返上し、姓ももとの宮内に戻し、当時の辺境の地での開拓に挑戦したのである。大転換である。今の時代で言えば「安定した収入を捨ててインターンして新規就農」といったところかもしれない。市蔵たちは猛烈なバイタリティーをもって開拓に勤しみ、この地でも大きな成果を上げ続けたという。

ところで本田は、ここ数年、若者の人口が増えているのだと地区の方から聞いた。現在47世帯、およそ90人が暮らしている。

町のうごき

(12月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,414	-6	男 3	18	15	6
女	9,412	-5	女 2	18	18	7
計	17,826	-11	計 5	36	33	13
世帯数	8,630	-4	(12月中の届出)			
窪川地域	12,504人		大正地域	2,556人	十和地域	2,766人

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	1月10日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.298
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.35
化学的酸素要求量	≤ 10.0	2.037

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部